

2. 2025年度 PBL 活動概要

日本語を母語とする児童と日本語を母語としない児童の交流

チーム名： 多援開泰

于子晴，大野朱音，小西光，小西裕美，張雅坤，木八慧

本研究は、日本語を母語としない児童生徒と日本語を母語とする児童生徒を対象に、両者が対等な立場で関わり、互いの多様性や困難を理解し合うことのできる活動の在り方を検討することを目的とする。とりわけ、日本語を母語とする人と日本語を母語としない人が、言語的な優位性に依拠することなく、日本語を媒介としながら相互に理解を深めることのできる「あそび」に着目した。その具体的な実践として、衣装体験と書写体験を組み合わせたワークショップを実施した。本ワークショップには、保護者4名および子ども6名が参加した。参加者は受付後に同意書への署名およびアンケートへの回答を行い、その後、子ども4名及びその保護者4名が衣装に着替えたうえで書写体験に取り組んだ。活動の過程では、文化的背景や日本語使用の程度の違いを超えて、子ども同士や親子間に自然な交流が生まれる様子が確認され、それらのやり取りを観察・記録し、質的資料として収集した。最後は、回収したアンケートの内容および観察記録をもとに分析を行い、本実践がもつ教育的意義について考察する。

Keywords：外国にルーツを持つ児童生徒，JSL，多様性，社会包摂，異文化理解

1. 研究概要

近年グローバル化が進み、学校では外国にルーツを持つ児童生徒、日本語を母語としない児童生徒が増加している。日本においても文部科学省によるJSL (Japanese as second language) カリキュラムという日本語を母語としない児童生徒をサポートするカリキュラムが開発・実施されているが、児童生徒個人の言語習得には背景などを踏まえて個人差があり、実際のところ言語学習は現場の教師に委ねられているのが現状である。¹⁾日本語を「ヘゲモニー言語(そのコミュニティを支配する言語)」とせず、日本人の児童生徒と外国人の児童生徒とが対等にコミュニケーションをとることを可能にすることを本研究は目指している。

以上のような現状や目的を踏まえ、外国人の児童生徒を日本の在籍学級で受け入れやすくするために、日本語を母語とする児童生徒、母語としない児童生徒を包摂した「日本語を母語とする人と日本語を母語としない人が、互いの多様性や困難を理解し合うことのできるあそび」について提案するのが本研究の目的である。

2. 先行研究

収集・分析した先行研究、統計データを総括する。調査領域は、外国人児童生徒の統計的実態、言語能力向上のためのアプローチ、具体的な支援実践、および子どもの発達段階と人間関係の4点に整理される。

2-1 外国人児童生徒の統計的実態

第一に、外国人児童生徒を取り巻く現状と統計データについてである。2025年時点での調査および令和5年度のデータによれば、岡山県内の義務教育諸学校に通う外国人児童は779人、岡山市内では466人であり、不就学児童も僅かながら確認されている。(表1参照)²⁾

表1 学齢相当の外国人の子供の就学状況の把握状況(都道府県・指定都市別(小学生相当・中学生相当計))

1-2 学齢相当の外国人の子供の就学状況の把握状況
(2) 学齢相当の外国人の子供の就学状況の把握状況(都道府県・指定都市別(小学生相当・中学生相当計))
●令和5年度 都道府県(指定都市を含む)別人数

	就学		③ 不就学	④ 転居・出国 (予定含む)	⑤ 就学状況 把握できず	⑥ その他	①~⑥ 計	⑦(参考) 住民基本 台帳の人数(Q3)と の差
	① 義務教育 諸学校	② 外国人学 校						
岡山県	779	58	8	41	3	0	889	0
岡山市	466	8	3	28	2	0	507	0

岡山市の外国人住民はベトナム、中国、韓国の順に多く、国籍の多様化が進んでおり、支援対象の背景も多岐にわたることが示唆される。

2-2 言語能力向上のためのアプローチ

言語能力を高めるための具体的なアプローチについては、単に日本語の運用能力のみを強化するのではなく、学習者と支援者が相互に関わり合いながら成長する視点が重要であるとされている。池上(2011)は、言語能力を「生活者としての日本人と協働し、ことばによる活動を作り上げていく力」と定義し、日本社会に生きる全ての人々の能力育成が必要であると説いている。³⁾

2-3 具体的な支援実践

共生社会に向けた具体的な交流実践について、御館(2019)は、地域日本語教育には「社会参加を目指した言語習得」と「社会変革を目指した相互学習」

の両輪が必要であると述べている。⁴⁾実際の交流活動としては、オンラインでの海外交流や、料理、歌、遊び(「氷おに」など)を通じた非言語コミュニケーションを含む活動が、児童の情意的な変容や異文化理解に効果的であることが示されている。

2-4 子どもの発達段階と人間関係の変容

本研究の対象である児童の発達段階と人間関係の変容について述べる。國枝ら(2006)の研究によれば、児童期の発達は、6~8歳の低学年(大人への依存・模倣)、9~10歳の中学年(仲間関係の重視・大人からの自立)、11~12歳の高学年(特定の友人との親密化・プライバシーの芽生え)に区分される。また、同研究では、現代の子どもには固定的な「ギャング・グループ」はあまり見られず、関係性はより流動的かつ少人数化していることが指摘されている。

⁵⁾

2-5 先行研究のまとめ

先行研究においては、外国人児童の「言語能力を高める」ために、母語の尊重や遊びの要素を取り入れた包括的な支援が必要であること、対象児童の発達段階に応じたきめ細やかなプログラム設計と、双方向の学び合いを促す環境づくりが不可欠であることが明らかになった。

3. ワークショップの実施

3-1 ワークショップ概要

ワークショップを以下の日程で実施した。

実施日：2025年12月20日(土) 12:30-14:00

場所：岡山大学 津島キャンパス

教育学部講義棟1階5102教室

参加者：JSL児童5名、幼児1名(女子3名、男子3名)

保護者4名

本ワークショップは、小学生とその保護者を対象にしている。主要なアクティビティとして、中国の伝統衣装の試着、筆ペンを用いた漢字の書写体験の2点を用意した。これらの体験を通じて、漢字が中国大陆から日本に伝わった歴史的な背景を想像しながら学び、昔の中国や日本の人々の生活様式をイメージし理解することにつながる。「漢字のルーツを知る」、「日中両国の文化の共通点と違いを感じ取る」、「実際にやってみることで深く理解する」という三点を掲げており、子どもたちが楽しみながら異文化理解と教養を深めることを目指している。また、書写のお手本となるプリントや衣装の説明などの視覚的展示と院生による言語的解説を有機的に結びつけ、参加者の異文化理解深化を目指した。書写のお手本として、三つの故事成語「完璧」、「他山の石」、「温

故知新」を選定し、2026年の干支である「馬」も用意した。お手本となる字体は、楷書や行書、草書など様々な様式の字体を用意した。しかし、お手本はあくまでも参考であり、参加者の主体性を尊重して好きなものを書いていいという声掛けを徹底した。各成語に対しては、出典と意味の簡潔な解説、概念を視覚化した解説漫画、日本語と中国語による対訳文という3点セットからなる学習資料を作成した。

参加者の着用する衣装は男女別に各4点、計8点を準備した。男性用衣装については、そのデザインが複数の時代を通じて類似性が高く、時代による明確な視覚的区別が困難であるという特性を踏まえ、時代特徴が顕著に表れる女性用衣装を展示の軸とした。具体的には、唐代、清代、元代という各時代の特徴を強く反映した女性用衣装を選定し、並列展示を行うことで、時代ごとの服飾文化の変遷を理解できるように設計した。全ての展示には、対応する日中の時代を明記し、日中間の歴史的、文化的な時間軸の対照理解を促進した。また、ワークショップ内で参加者の学校生活や日常生活における困りごと等のアンケート調査を行った。なお、院生は撮影を含む参与観察を行い、活動の説明以外の意図的な声かけや指導等は行っていない。ワークショップの実施の流れは図1の通りである。

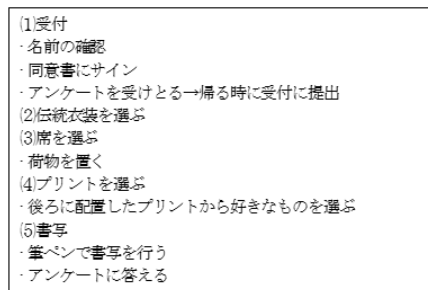


図1 ワークショップの流れ



図2 書写体験を行う小学生ら

3-2 ワークショップのフィードバック

ワークショップ内で参与観察者である院生は、参加者と積極的にコミュニケーション(日本語、中国

語による)を図った。以下にその際に得た参加者による感想とその分析をいくつか記述する。

(1)WSの活動の効果

- ・活動内容に対する子どもの反応に関して、学校における書写の影響により、児童らは興味を持って書写の活動を行っていた。また、児童は積極的に衣装を着用しており、衣装と書写の両方を楽しんでいた(図2参照)。

(2)WS活動の課題

- ・用具の選定に関して、筆ペンの取り扱い難さが指摘されたため、本格的な毛筆の使用が望ましい。
- ・学年による書写技能の差が大きく、すべての参加者に適した難易度設定の必要性が示唆される。

(3)WS運営上の効果と課題

- ・効果：親子での参加の機会を設けたことにより、普段忙しい保護者と子どもたちがともに学び、コミュニケーションをとることを可能にした。保護者からは、継続的な開催を希望する声が寄せられた。
- ・課題：参加者の応募が困難だったことで、参加人数が少なく、JSLの児童がほとんどになったことで、JSL児童と日本語を母語とする生徒の交流の機会を設けることができなかった。

PBL指導教員からは、「親子交流」を主軸とした点は、国境を越えた普遍的な関心事として有効であり、保護者が子供の学習姿勢を新たに認識する機会となった意義が指摘されている。今後の発展に関しては、対象を「親子」に明確に焦点化することで参加者の増加と活動の深化が図れるとの見解が示された。また、活動成果と次回計画をあらかじめ公表することや、得られた知見を後継者へ体系的に継承することの重要性が提案されている。

4. アンケート集計結果

以下に、ワークショップの参加者(子ども6名、保護者4名)を対象に行ったアンケートの質問と回答を抜粋して記載する。本アンケートは同意書により、個人が特定できない形での研究等への使用の許諾を保護者から得ている。本調査では、回答者の多様な意見を幅広く収集することを目的とし、特定の心理尺度や評価尺度は用いなかった。回答は自由記述および非尺度式の選択肢形式で構成されている。

子ども用アンケートには、8歳以下から11歳までの中国にルーツを持つ子どもが回答した。全ての子どもが生活や学校で困っていることはないと回答したことが分かる。しかし、勉強では「日本語」と「国語」に困っているという意見があり、外国にルーツ

を持つ子どもへの「日本語」のサポートが必要であることが明らかになった(図3参照)。

保護者のアンケート結果からは、ほとんどの保護者が生活に問題を抱えていないことが分かった。子どもの学校生活に関しては、一部の保護者から授業と宿題で困っているという意見もあったが、全員ではなかった。自由記述からは、本ワークショップを絶賛する声が上がった。これはワークショップの現場でも実際にもらったコメントと一致している(図4参照)。

- | |
|---|
| ①なんさいですか。
8さいいか:3名
9さい:1名
10さい:1名
11さい:1名 |
| ②ルーツ(おとうさん、おかあさんのくにをおしえてください)。
中国と回答:5名
日本、中国と回答:1名 |
| ③いつからにほんにすんでいますか。
全員が「にほんでうまれた」と回答。 |
| ④クラスのともだちとなかよくできていますか。
全員が「できている」と回答。 |
| ⑤せいかつでこまっていることはありますか。
全員が「ない」と回答。 |
| ⑥がっこうでこまっていることはありますか。
全員が「ない」と回答。 |
| ⑦べんきょうでこまっていることはありますか。
ない:5名
ある:1名
⇒「にほんご」と「こくご」に困っていると回答。 |

図3 子ども用アンケート(抜粋)

- | |
|---|
| ③いつから日本に住んでいますか。
全員が5年以上と回答 |
| ④生活で困っていることはありますか。(複数可)
全員が「とくにない」を選択。 |
| ⑤おさんは日本で生まれましたか。
全員が「はい」を選択。 |
| ⑥おさんの学校生活で困ることはありますか。
全員が「ない」を選択。 |
| ⑦おさんは授業で困っていますか。
はい:1名
いいえ:3名 |
| ⑧おさんは宿題で困っていますか。
はい:1名
いいえ:3名 |

⑩支援を受けていますか。(複数可)

はい: 2名

学校のみ選択: 1名

学校、国や市、地域(近所の人)、友人の全項目を選択: 1名

いいえ: 2名

⑪その他(自由記述・簡単に)

⇒記述に関しては、参加者の表記そのままを記載。

・参加させていただき、とても良かったです。また、異文化交流会に参加したいです。

図4 保護者用アンケート(抜粋)

5. 今後の展望

当初予定していた外国にルーツを持つ児童生徒の学習面でのサポートは、学校との連携が不可欠である。しかし、本PBLの活動では、短期的・限定的な活動になる懸念があり、困難であることが分かった。そこで、「外国にルーツを持つ児童生徒」を社会包摂できるような研究テーマとして設定し直した。調査・研究を進めるうちに、「多様性・社会包摂」のテーマにおける対象は幅広く、問題解決は簡単ではないことなど多くの気づきを得た。問題解決に当たっては、ひとつひとつの現状や事例を自分たちの目で確認していくことが重要であると考えている。今回実施したワークショップにおいては、「親子で」実施できることの重要性を知った。普段仕事で忙しく家族で遊んだり活動したりすることが少ない現状を保護者から聞いた。そのため、今回実施したワークショップのように、親子で実施できるものを通して、学習面のサポートや生活など困っていることの把握・支援につなげていくことは可能性のひとつとして考えられる。

6. PBLについての感想

本チームは、日本人3名、中国人3名によって構成されており、研究目標とする「日本人の児童生徒と外国人の児童生徒の包摂」を体現したチームであった。そのため、本研究内でも、互いを理解し合うところから始め、互いを尊重できる活動を心がけた。まとめとして、PBLを通してメンバーが感じた感想を以下に記述する。

・今回のPBL活動の中で最も成長を実感したのは、協調性の面である。相手の意見を尊重しつつ、自分の考えや意見をより適切に伝える方法を学んだ。

・互いに上手くコミュニケーションが取れていたとは言えない状況ではあったが、計画したことを完全に頓挫させてしまうことなく形にすることができたというのは大きな成果であると感じた。

・チーム構成が多様性・社会包摂へのチャレンジであったと思う。多様性はその人のルーツや属性にあるのではないことを感じた。お互いを理解したいという姿勢の重要性を学んだ。

・コミュニケーションや相互支援など質的構築の項目が、他者を理解しようとし、尊重しようとすることを基盤として成り立っていることをチーム活動を通して知ることができた。

・チームとしては、活動初期に比べて役割分担が明確になり、互いの強みを活かしながら協力できるようになったといえる。意見の違いがあっても対話を重ねることで合意形成が進み、チーム全体として柔軟に課題へ対応できるよう成長した。

・チーム全体として、メンバー一人ひとりが自分の役割をよりよく理解し、それぞれの得意分野や専門性を活かしながら、自分から進んでチームに貢献できるようになったと感じる。

本研究の遂行にあたり、ご指導、ご助言およびご協力を賜りました以下の先生方に、心より御礼申し上げます。

- ・ファシリテーター 又吉里美先生
- ・中倉智美先生
- ・中東靖恵先生
- ・前田英雄先生
- ・木村功先生
- ・PBL指導教員の先生方

参考引用文献・URL

1) 文部科学省「1 JSL カリキュラム開発の基本構造: 文部科学省」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001/008/001.htm (最終閲覧日 2026年1月10日)

2) 法務省(1959年~2011年)「在留外国人統計(旧登録外国人統計)統計表」| 出入国在留管理庁

https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html (最終閲覧日 2026年1月10日)

3) 池上摩希子(2011)「地域日本語教育の在り方から考える日本語能力」『早稲田日本語教育学』9, pp.85-91

4) 御館久里恵(2019)「地域日本語教育に関わる人材の育成」『日本語教育』172, pp.3-17

5) 國枝 幹子・古橋 啓介(2006)「児童期における友人関係の発達」『福岡県立大学人間社会学部紀要』15(1), pp.105-118